

# 新約聖書「ヤコブの手紙」にみとめられる裏返し構造

## —「物語」とはいえないテキストの事例—

Contrast structure in “The Epistle of James”

—As cases not based on “story”—

大喜多 紀明<sup>1</sup>

<sup>1</sup>滋賀民俗学会

Noriaki Ohgita<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Folklore Society of Shiga

キーワード：裏返し構造，ヤコブの手紙，聖書

Key words : Contrast structure, Epistle of James, Bible

### 抄録

裏返し構造は、異郷訪問譚にみとめられる構造であるとされてきた。しかし、近年、異郷訪問譚ではないにもかかわらず、裏返し構造が見いだされる事例が聖書テキストにおいて紹介されている。こうした裏返し構造の出現が聖書全般にみとめられる特徴か否かを検証するため、本稿では、新約聖書に収納されたテキストの一つである「ヤコブの手紙」の分析を、裏返し構造の観点から行った。

### 1. はじめに

従来、裏返し構造は、異郷訪問譚にみとめられる構造的な特徴であると考えられてきた。たとえば、大林論文<sup>(1)</sup>では、一般的に異郷訪問譚とみなされる「イザナキの黄泉国訪問譚」，「神功征韓譚」，「浦島子」，「甲賀三郎」が裏返し構造により構成されていることが示したうえで，「異郷訪問譚は、『古事記』の昔から後世まで，少くとも『神道集』のころまで，一貫して前半と後半の裏返しという同じ構造をもっていることが明らか<sup>(2)</sup>であり，かつ，この構造が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」<sup>(3)</sup>であるという推認が提示された<sup>(4)</sup>。また，大林論文では，物語を裏返し構造にもとづいて分析する効果として，「このような分析によって，物語のなかのモチーフないし挿話が物語全体のなかでどのような位置を占めているかを知ることができる。たとえば，諏訪縁起発端の三界分治も，このような分析によって始めてその深い意味や全体中に占める位置が理解されるのである」<sup>(5)</sup>と述べられている。つまり，大林論文は，裏返し構造が異郷訪問譚に一般的に見いだされる構造上の特徴であり，かつ，かかる裏返し構造を前提に異郷訪問譚を分析することにより，当該物語にお

ける各モチーフの役割を明らかにすることができる」と述べている。

一方，大林論文は次のようにも述べている<sup>(6)</sup>。

日本文学上の他の作品，また現在の昔話や伝説における異郷訪問譚にも，同様な構造がみられるかどうか，また異郷訪問譚以外にも，どのような説話にこの構造がみられるか，さらにこのような構造をもたない異郷訪問譚は，どのような構造をもっているのか，の検討は今後の課題である。

つまり，裏返し構造が見いだされる範囲，とりわけ，異郷訪問譚以外にこの構造がみとめられる事例があるか，については今後の課題<sup>(7)</sup>と位置づけた。

大林の問題提起を受け，筆者は，アイヌ民族の口承テキスト，聖書テキスト，手紙形式のテキストを，裏返し構造を前提に分析したところ，大喜多 (2016)<sup>(8)</sup>，大喜多 (2017)<sup>(9)</sup>，大喜多 (2018a)<sup>(10)</sup>大喜多 (2018b)<sup>(11)</sup>では，異郷訪問譚といえないにもかかわらず裏返し構造からなる事例を示すことができた。

アイヌ口承テキストにおいて、当該テキストが異郷訪問譚といえないにもかかわらず裏返し構造が見いだせる事例が存在する理由については、そもそもアイヌ民族を著者（あるいは話者）とするテキストにおいてしばしば交差対句が見いだされている<sup>(12)</sup>点から、大喜多（2016）では「交差対句の使用を好むアイヌ民族の心性が、異郷訪問譚以外の形式でも裏返し構造を発現させる一因である可能性がある」との推論<sup>(13)</sup>が述べられた。

大喜多（2016）の推論を踏まえ、大喜多（2017）および大喜多（2018a）では、アイヌ民族によるテキストと同様に交差対句がしばしば見いだされることが知られている聖書<sup>(14)</sup>に注目し、かかるテキストにも異郷訪問譚といえないにもかかわらず裏返し構造が見いだせる事例が存在するかの確認が行われた。その結果、旧約聖書「創世記」の冒頭に配置された5つの物語をテキストとした大喜多（2017）と新約聖書「マタイによる福音書」冒頭の5つの物語をテキストとした大喜多（2018a）の双方において、かかる事例が示された。そのうえで、大喜多（2017）と大喜多（2018a）では、対称性仮説の蓋然性が高いことが述べられた。

一方、対称性仮説の蓋然性を論じるうえで、テキストの著者（あるいは話者）の属性の差異を考慮する必要があるといえる。アイヌ口承テキストの著者（あるいは話者）はアイヌ民族（つまり単一の民族）によるものである。しかし、聖書テキストの著者の大部分は古代イスラエルを含むイスラエル民族であるといえようが、たとえば「ルカによる福音書」や「使徒行伝」の著者はイスラエル民族ではない。かつ、聖書テキストの場合は編集史に関する議論を前提に、現存する各「巻」の姿を理解するべきであるといえる<sup>(15)</sup>。つまり、聖書テキストの場合は、アイヌ口承テキストほど単純ではなく、聖書を構成する各「巻」の属性を踏まえ、個別に検証するべきであるといえ、かかる個別の検証を踏まえ、聖書全般の特徴を議論する必要がある。

かかる個別の検証の一環として、大喜多（2018c）<sup>(16)</sup>および大喜多（2018d）<sup>(17)</sup>では、著者がイスラエル民族ではない「巻」の一つである「ルカによる福音書」の構造を検証し、当該テキストが典型的な裏返し構造により構成されていることを明らかにした。

なお、大喜多（2018b）では、「異郷訪問譚とは

言えないと同時に、そもそも文学上のジャンルとしての物語とも言えない」<sup>(18)</sup>テキストである挨拶文の一種「お悔やみの手紙」に注目し、当該テキストにおいて裏返し構造が見いだせることを指摘した。かかる裏返し構造の出現について、大喜多（2018b）は、手紙形式の文書の場合、「手紙の文書は送り主そのものではないものの、事実上、手紙によってメッセージは伝達される」<sup>(19)</sup>という点から、「送り主は、直接ではないものの、手紙という手段により先方を訪問したとみなすことができる」<sup>(20)</sup>と述べた。つまり、かかる手紙は、異郷訪問譚的な性質があるといえ、「事実上の異郷訪問譚とみなせる」<sup>(21)</sup>ため、大林の推認の範囲内であるという仮説が大喜多（2018a）では示された。

以上を前提に、本稿では、新約聖書に収納された「巻」の一つであり、イスラエル民族であるヤコブを伝統的には著者とする「ヤコブの手紙」の構造分析を行い、見いだされる裏返し構造を資料として示したい。

## 2. 裏返し構造

裏返し構造に関連する一連の論文、大喜多（2016）、大喜多（2017）、大喜多（2018a）、大喜多（2018b）、大喜多（2018c）、大喜多（2018d）では、下記のAとB双方の特徴をもつ構造を裏返し構造と呼んだ。

A：物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する<sup>(22)</sup>。

B：物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する<sup>(23)</sup>。

上述した裏返し構造に関する一連の先行研究に準じ、本稿でも、特徴Aと特徴Bの双方に合致する構造を裏返し構造と呼ぶ。

なお、裏返し構造は、ルーマニアのフォークロリストであるミハイ・ポップが、ルーマニアの昔話「兵士としての少女」に最初に見いだした形式<sup>(24)</sup>であり、かかるポップの研究は、プロップ<sup>(25)</sup>やレヴィ＝ストロース<sup>(26)</sup>らにより行われた一連の物語分析法の研究の一つである。

### 3. テキスト

本稿では、新約聖書に収納された「巻」の一つである「ヤコブの手紙」全体をテキストとする<sup>(27)</sup>。新改訳聖書の「ヤコブの手紙」に関する解説には、当該テキストの著者について次のように書かれている<sup>(28)</sup>。

この手紙の表現とエルサレム会議の時のヤコブの演説とは、ギリシヤ〔原文ママ〕語において類似しているので（一1と使一五23，二5と使一五13等），主の兄弟ヤコブが著者であると考えられる。

このように、その題名が示すように、当該テキストの著者は伝統的には「主の兄弟ヤコブ」である。しかし一方で、辻論文<sup>(29)</sup>は、当該「ヤコブの手紙」の著者について、「主の兄弟ヤコブの名を借りた著者自身がどのような人物であったかについては最早知るすべがない。著者は自分については、「教師」の一人であったこと（3:1-2）以外には何も語っていない」<sup>(30)</sup>と述べ、さらにこの論文の脚注では、「ヤコブ書<sup>(31)</sup>は、主の兄弟ヤコブ自身の手になるものではない。また、ギリシヤ語の堪能な協力者を得て書いたとも考えられないし（F. Mußner, *Der Jakobusbrief* [HThK 13,1], Freiburg u. a. 1987,8 に反対），主の兄弟が語ったものの諸断片を後に編集したという仮説（P. H. Davids, *The Epistle of James* [NIGTC], Grand Rapids 1982, 12）にも無理がある」<sup>(32)</sup>と述べている。つまり、辻論文によれば、「ヤコブの手紙」の著者は明らかではない。ただし、当該テキストの著者を明らかにするところを本稿の目的としていないので、本稿では、当該テキストの著者を便宜上、「ヤコブ」と表記することにする。

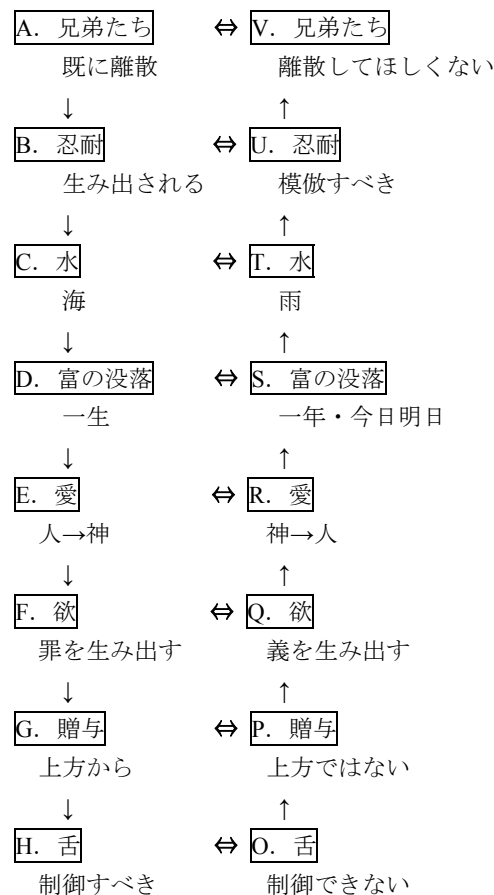
### 4. テキストの構造

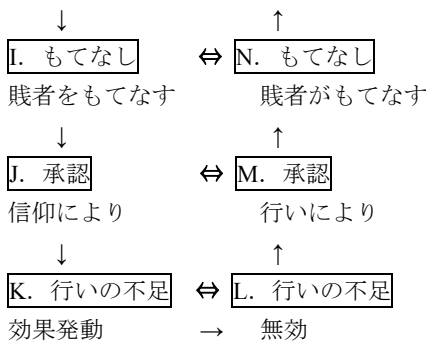
本節では、まず、「ヤコブの手紙」を下記のA～Vの合計22の断章に区分する。ここで、断章の範囲は、聖書に付された章・節立てを使用することにする。

断章	章・節立て
A	1章1節
B	1章2節～4節
C	1章5節～7節

D	1章8節～11節
E	1章12節
F	1章13節～16節
G	1章17節～25節
H	1章26節
I	2章1節～4節
J	2章5節～7節
K	2章8節～13節
L	2章14～20節
M	2章21節～24節
N	2章25節～26節
O	3章1節～12節
P	3章13節～18節
Q	4章1節～4節
R	4章5節～7節
S	4章8節～5章6節
T	5章7節～9節
U	5章9節～18節
V	5章19節～20節

以上の断章に基づいて作成した図式を次に示す。





ここでの図式に基づけば、AとV、BとU、CとT、DとS、EとR、FとQ、GとP、HとO、IとN、JとM、KとLがそれぞれ対応している。以下、各対応に関する説明をする。

AとVについてである。Aは、「ヤコブの手紙」の冒頭部分であり、ヤコブによる挨拶が離散したイスラエル12部族に向けて記されている。一方、Vは当テキストの末尾部分であり、「わたしの兄弟たち」に対し、真理の道から踏み迷う者があれば、それを引き戻すべきであると記されている。ここで、Aにおける12部族は既に離散してしまっている（過去の事実）のに対し、Vにおける「わたしの兄弟たち」は、冒頭の12部族に対比して書かれているといえ、「わたしの兄弟たち」がかつての12部族のような離散した状況になってほしくないというヤコブの願い（未来への願望）が書かれているといえる。つまり、ヤコブは、「わたしの兄弟たち」が12部族と対照的になることを願っているといえるので、AとVは対照的である。

断章	状況	時制
A	離散済み	過去
V	離散してほしくない	未来

続いて、BとUについてである。BとUの箇所は、ともに「忍耐」をテーマとしているのだが、Bでは、ヤコブは、苦難により「忍耐」が自身から生み出されると述べており、一方Uでは、「忍耐」を例えばヨブのような他者を模倣すべきであると主張している。つまり、「忍耐」の生成が、一方は自身に由来しており、他方が他者に由来している点が対照的である。

断章	忍耐の由来
B	自身から生み出される

### U 他者を模倣

CとTには、ともに、「水」にかかわる比喩が描かれている。Cでは、「疑う人」を「揺れ動く海の波」と比喩しており、Tには、「地の尊い実りを、前の雨と後の雨<sup>(33)</sup>とがあるまで、耐え忍んで待っている」と書かれている。

断章	水の分量	水の意味
C	大	不安定
T	小	恩恵

つまり、Cにおける「水」は「海の波」という大きな分量であり、かつ、心が不安定な状況を比喩している。対し、Tにおける「水」は「雨」という小さな分量であり、かつ、実りをもたらす恩恵を比喩しているといえ、双方は対照的である。

DとSは、ともに「富の没落」がテーマであり、財に執着した生き方には限界が訪れることが旅人の比喩により描かれている。つまり、Dには、「富んでいる者も、その一生の旅なかばで没落する」と書かれているのに対し、Sには、「「きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに一か年滞在し、商売をして一もうけしよう」という者たちよ。あなたがたは、あすのこともわからぬ身なのだ」と書かれており、双方の「旅」の期間は「一生」（長期間）と、「一年」あるいは「あすのこともわからぬ」（短期間）という対照的なものである。換言すれば、富んでいる者は、Dにおいては長期間かけて没落し、Sでは短期間で没落する可能性があるとしてヤコブは述べている。

断章	富の没落までの期間
D	長期間（一生）
S	短期間（一年あるいは今日明日）

EとRはともに「愛」をテーマとしている。ただし、Eには「神を愛する者たちにいのちの冠を受けるであろう」、つまり、人による神への「愛」が描かれているのに対し、Rには「神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる」、つまり、神による人への「愛」が描かれており、双方は対照的である。



断章	愛
E	人→神
R	神→人

FとQは「欲」がテーマである。Fには、人が誘惑に陥る理由が「欲に引かれ、さそわれる」ことによることと、「欲」が罪を生み出すことが書かれている。対し、Qには、義を求めても得ることができない理由が「求めないから」であると書かれている。つまり、同じ「欲」であったとしても、Fでは罪を生み出す「欲」に注目しており、逆に、Qでは罪を生み出す「欲」にも言及しているものの、むしろ、義を生み出す「欲」に注目しているといえ、こうした前提に立てば、双方の「欲」がもたらす効果は対照的である。

断章	欲の効果
F	罪を生み出す
Q	義を生み出す

GとPは「贈与」がテーマである。Gでは神からの「贈与」が上方からくることが書かれている。それとは反対に、Pでは、「悪魔的」な「贈与」は上方からくるものではないことが書かれており、「贈与」が到来する方向は対照的である。

断章	贈与
G	上方から
P	上方ではない

HとOは「舌」に対する制御がテーマである。Hでは、ヤコブは「もし人が信心深い者だと自任しながら、舌を制することをせず、自分の心を欺いているならば、その人の信心はむなしいものである」と述べ、舌を制御すべきであることを主張している<sup>(34)</sup>。それに対し、Oでは、ヤコブは「舌を制しうる人は、一人もいない」と述べ、むしろ、舌は制御できないことを断言している<sup>(35)</sup>。かかる双方は対照的である。

断章	舌
H	制御可能
O	制御不可能

IとNは、「もてなし」における「賤者」との関

わりがテーマである。Iでは、ヤコブは、「りっぱな着物を着た人」と「貧しい人」<sup>(36)</sup>を差別するべきではなく、等しくもてなすべきであることを主張している。それに対し、Nでは、ヤコブは「かの遊女ラハブ<sup>(37)</sup>でさえも、使者たちをもてなし、彼らを別の道から送り出した」という、旧約聖書に書かれたラハブの行為を引用し、行いがいい信仰を否定している。ここで、Iの場合は、「賤者」がもてなされる立場にあるのだが、Nでは逆に、「賤者」がもてなす立場にあり、双方は対照的である。

断章	賤者
I	もてなされる立場
N	もてなす立場

続くJとMは何により「承認」されるかがテーマである。Jでは、ヤコブは「神は、この世の貧しい人々を選んで信仰に富ませ、神を愛する者たしに約束された御国の相続者とされたではないか」と述べ、「信仰」により神の「承認」が得られること主張している。一方、Mでは、ヤコブは「人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない」と述べ、「信仰」のみによるのではなく、むしろ「行い」により神の「承認」が得られることを主張している。つまり、簡単に言えば、ヤコブはJでは「信仰」で「承認」が得られると述べているが、Mでは「行い」で得られると述べており、双方は対照的である。

断章	承認
J	信仰による
M	行いによる

最後に、KとLについてである。KとLのテーマは、「行いの不足」がもたらす効果である。Kでは、律法を完全に行うことができないことにより、律法違反が適用され、律法による効果が発動される様子が示されている。それに対し、Lでは、行いが不足することにより信仰が無意味になる様子が示されている。つまり、KとLはともに「行いの不足」が描かれているものの、双方がもたらす効果は、律法の発動（有効）と信仰の無意味化（無効）であり対照的である。

断章	効果
K	律法有効化
L	信仰無効化

以上を、特徴 A および特徴 B と照合してみる。まず、テキストにおける、A と V, B と U, C と T, D と S, E と R, F と Q, G と P, H と O, I と N, J と M, K と L は、それぞれ対照的な関係性を持っている。この点は、特徴 A と合致している。また、前半要素については

A→B→C→D→E →F→G→H→I→J→K

という順序であるのに対し、後半要素は

L→M→N→O→L→O→P→Q→R→S→T→U→V

である。つまり前半と後半は逆転しており、この点は、特徴 B と合致している。以上より、テキストは特徴 A と特徴 B の双方に合致する。以上より、本テキストは、合計 11 対の対応をもつ裏返し構造である。

## 5. おわりに

本稿では、聖書テキストの一つである「ヤコブの手紙」をテキストに、裏返し構造に基づいた構造の検証を行い、当該テキストが典型的な裏返し構造からなることを示した。ただし、こうした裏返し構造の発現が、対称性仮説に基づくものなのか、あるいは、大林の推認に基づくものなのかについては検討しなかった。かかる点については今後検証するつもりである。

## 注

- (1)大林太良. 異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1979, (2), p.1-9.
- (2)大林 (1979 : 8).
- (3)大林 (1979 : 8).
- (4)本稿では、これを「大林の推認」と呼ぶ。
- (5)大林 (1979 : 8).
- (6)大林 (1979 : 8-9).
- (7)本稿では、これを「大林の問題提起」と呼ぶ。
- (8)大喜多紀明. アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造：異郷訪問譚によらない事例. 北海道言語文化研究. 2016, (14), p.45-72.
- (9)大喜多紀明. 聖書「創世記」冒頭の 5 つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例. 北海道言語文化研究. 2017, (15), p. 195-216.
- (10)大喜多紀明. 新約聖書「マタイによる福音書」の冒頭に配置された 5 つの物語の構造：「対称性

- 仮説」の蓋然性. 北海道言語文化研究. 2018, (16), p. 25-48.
- (11)大喜多紀明. 「お悔みの手紙」に見られる裏返し構造—物語とは言えないテキストの場合—. 人間生活文化研究. 2018, (28) p. 4-13.
  - (12)大喜多紀明. アイヌ語を母語としないアイヌ民族による言語テキストに見出される交差対句：民俗的修辞技法の継承. 北海道言語文化研究. 2014, (12) p. 85-104.
  - (13)当該推論を大喜多 (2018a) では「対称性仮説」と呼んだ。本稿でもこの呼称を使用する。
  - (14)日本聖書協会. 聖書. 日本聖書協会, 1989.
  - (15)嶺重淑. フェリサイ派と徴税人の譬え:ルカ 18: 9-14 の編集史的考察. 神學研究, 2008, (55) p.17-25.
  - (16)大喜多紀明. 「ルカによる福音書」全体における裏返し構造. 人間生活文化研究. 2018, (28) 75-81.
  - (17)大喜多紀明. ルカによる福音書 9 章 51 節～19 章 46 節にみられる裏返し構造: 対称性仮説に関する検証に向けて. 人間生活文化研究, 2018, (28) 610-618.
  - (18)大喜多 (2018b : 5)
  - (19)大喜多 (2018b : 11)
  - (20)大喜多 (2018b : 11)
  - (21)大喜多 (2018b : 12)
  - (22)本稿では、これを「特徴 A」と呼ぶ。
  - (23)本稿では、これを「特徴 B」と呼ぶ。
  - (24)当該構造の初出は『Folclor Literar』誌 (1961 年発行分) 掲載のミハイ・ポップの論文「Metode noi cercetarea structurii basmelor」である。だが、筆者はこれを手に入できなかったため、Pop, Mihai. “Coordonate structurale ale folclorului literar”. Folclor literar românesc. 1990, p. 77-92. を本稿では参照した。
  - (25)例えば、ウラジーミル・プロップ. 北岡誠司, 福田美智代 (訳). 昔話の形態学. 水声社, 1987.
  - (26)例えば、クロード・レヴィ＝ストロース. 田島節夫 (訳). 神話の構造. みすず書房, 1972.
  - (27)便宜上、本稿では、日本聖書協会 (1989) に記載された「ヤコブの手紙」をテキストとする。
  - (28)いのちのことば社. 聖書 新改訳 注釈・索引・チェーン式引照付. いのちのことば社, 1981.
  - (29)辻学. 「ディアスポラ書簡」としてのヤコブ書：文学類型・主題・読者との関係をめぐって. 神學研究. 1997, (44), p 57-78.
  - (30)辻 (1997 : 66).
  - (31)「ヤコブ書」とは「ヤコブの手紙」のことである。

(32)辻 (1997 : 77).

(33)ここでの「前の雨と後の雨」とは、旧約聖書「ヨエル書」2章23節に記載された「シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び楽しめ。主はあなたがたを義とするために秋の雨を賜い、またあなたがたのために豊かに雨を降らせ、前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる」に由来していると解釈できる。かかる解釈に基づけば、「前の雨と後の雨」とは、実りをもたらす恩恵の雨であるといえる。

(34)つまり、ヤコブは「舌」の制御が可能であると考えている。

(35)つまり、ヤコブは「舌」の制御が不可能であると考えている。

(36)本稿では、便宜上これを「賤者」と呼ぶ。

(37)ラハブは遊女であり、遊女は当時のイスラエルでは蔑まれる身分であった。本稿では、かかるラハブを「賤者」とみなす。

(受付日 : 2019年1月15日, 受理日 : 2019年2月1日)

### 大喜多 紀明 (おおぎた のりあき)

現職 : 一般社団法人地域コミュニティ談話会代表理事

学籍 : 自由が丘産能短期大学能率科通信教育課程福祉と心理コース2年。

東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了。理学修士。

専門は民俗学。

主な論文 : アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察 : 交差対句と心意。アジア民族文化研究。2012, (11), p.181-213.

聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造 : 異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例。北海道言語文化研究。2017, (15), p.195-216.